一人百物語

五月蓬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一人百物語

【Ｎコード】
Ｎ４３１８Ｕ

【作者名】
五月蓬

【あらすじ】
私一人の百物語。
百の話が揃った時、何が起こる？

〜〜〜〜〜

ホラー短編集です。百物語とは言ってますが、百もネタが保つかは……（―・―；）

一話完結なので、どこからでもお気軽にお立ち寄り下さいな。

間違い電話（前書き）

ホラーが大好きな五月蓬です。

大好きなだけで話を作るのが得意という訳ではありません（予防線）

百物語と言うとおり、一話完結のホラーの短編集です。

果たして百の話が出揃ったとき、何が起きるのか？

それとも百の話がでる前にネタが切れてしまうのか？（汗）

暖かい目で見守ってやって下さい（一人一）

間違い電話

「もしもし？わたしだよ」

それは間違い電話だった。俺は見たこともない電話番号が表示される携帯を取り、聞いたこともない女の声に耳を傾けた。

「番号間違ってますよ」

俺は簡単に言葉を返す。

「ごめーん。加奈子だよ」

別に名乗らなかったから間違いだと言ったわけではないが。

「いえ、本当に人違いですよ。僕、あなたのこと知りませんし」

俺は再び間違い電話だと教えてやる。

「ごめんね。風邪ひいちゃって声が変わってるから分からないよね。加奈子だよ。佐伯加奈子」

確かに声がかすれているが、そもそも俺は佐伯加奈子を知らない。

「知りませんよ。人違いですって」

すると佐伯加奈子はかすれた声を少し震わせた。

「……なんで意地悪するの？お話してくれてもいいじゃない……私のこと、嫌いになっちゃったの？」

面倒臭いな……

俺は顔をしかめた。名乗るのは気が引けたが、この女はそうでもしなきゃ引かないだろう。

俺は名乗ることにした。

「僕は田村です。人違いでしょう？」

流石に引くだろう。そう思っていたが、佐伯加奈子はさらに声を震わせた。

「どうしてそんな嘘吐くの？酷いよ……」

駄目だ。最初からとっとと切れば良かった。

俺は黙って佐伯加奈子の電話を切った。

ぷつりと佐伯加奈子の声は途切れる。

「気持ち悪いな」

俺は携帯をたたんであのかすれた声を思い出す。

少し寒気を感じた。

♪♪♪♪♪♪♪

その時鳴り響いた着信音に俺は肩を弾ませる。

携帯を再び開くとそこには

佐伯加奈子

さっき見たばかりの番号とその上に表示されたその名前。

またか……！

気味が悪いと思いつつ、聞き分けのない佐伯加奈子に苛立ちを覚えた俺は、無視すれば良かったものを、怒りに任せて電話を取った。

「おい！間違いだって言ってんだろ！しつこいぞ！」

俺の怒声に対し、佐伯加奈子は……

「何でいきない切ったの！？酷い！」

それを無視して逆に声を荒げた。

「私、何か悪いことした！？嫌われることした！？ねえ！言ってくれなきゃ分かんないよ！」

駄目だ。話を聞く気がない。

俺は再び電話を切る。

何相手にしてんだ馬鹿馬鹿しい。

怒りに任せて電話を取った自分に呆れる。

ただ相手にしなければいい。それだけなのだ。

♪♪♪♪♪♪♪♪

再び着信音。

佐伯加奈子

しつこいな……！

俺は着信を無視する。

♪♪♪♪♪♪♪♪……

しばらくの鳴り響いた着信音がようやく鳴り止む。

しかし、

♪♪♪♪♪♪♪♪

佐伯加奈子

再び着信。

まさか何度もかけてくる気か！？

俺は電話の電源ボタンに指をかける。着信音は消え、しばらくして携帯の電源は落ちた。

何なんだよ気持ち悪い……！

俺はあの声を思い出して、再び身震いする。

しかしもう大丈夫だ。携帯の電源は切った。

俺は気分転換にテレビをつけた。

偶然映ったのはニュース番組。

『……さんは病院に運ばれましたが間もなく死亡しました』

どこかの男の死を伝えるニュース。

それに目を奪われたその時、

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

電源……切ったよな？

俺は携帯電話に視線を落とす。

着信音を奏でる携帯には、切った筈の携帯には、その文字がはっきりと浮かび上がっていた。

佐伯加奈子

震える手で携帯を握る。そしてニュースが耳に飛び込む。

『……佐伯容疑者が走り去るところが目撃されており……』

俺の背筋に嫌なものが走る。

震える手で、俺は何故かその電話を取っていた。

「……そんなに怒ってるんだ。包丁でお腹を刺したこと」

沈んだかすれ声。
俺は震える声で訴える。
「ほ、本当に人違いなんだ！」

しかし佐伯加奈子は電話先で笑い、俺を解放してはくれない。
「あははは！もう私のこと、嫌いになっちゃったんだ！あはは！あはははは！」

狂った笑い声。そして……

「……じゃあもう一度刺しに行くから」

ぷつり

吐き気がした。ヤバい、ヤバい、ヤバい！
何なんだ！？何なんだ！？佐伯加奈子って今のニュースの！？包

丁で刺したって……それに今から刺しにいくって……！？

待て……落ち着け……人違いなんだ。別に俺を刺しにくるんじゃない。刺された男は死んでいる。そうだ。大丈夫だ。

でも電話を掛けてきた佐伯加奈子は男を刺して逃げているやつだ。警察に連絡したほうが……

落ち着き始めた俺は携帯を再び取り、百十番に掛けようとする。その時、終わりにさしかかったニュースが

『……佐伯容疑者はマンションの屋上から飛び降り、病院に運ばれましたが間もなく死亡しました』

……え？

俺は番号を打つ手を止める。

佐伯は死んでいる？

なら俺に間違い電話をかけてきたのは？

そもそも何で電源を切っていたのに電話は掛かってきた？

なんなんだ、あの間違い電話は？

♪♪♪♪♪♪♪♪

佐伯加奈子

携帯電話のディスプレイにその名前が浮かび上がる。

「ほら」

電話を取っていないのに、そのかすれた声は小さく響いた。

「間違い電話じゃ……ないじゃない」

携帯のディスプレイにかかった影。その主を俺は振り返り……

間違い電話（後書き）

間違い電話にはご注意を

公園手品ショー

小学生くらいのことだった。

近所の公園にはいつも多くの子供が集まっていた。

というのも、その公園には、面白い手品を見せてくれるおじさんがよく来ていたからだ。

お面をつけて、夏でも暑苦しいスーツを着込んで、いかにもといった感じの大きなシルクハットを被ったおじさんだ。

確実に職質されそうなそのおじさんは、その頃とても人気者で、近所の人なら誰でも知っていた。

最初の頃はお巡りさんに声を掛けられたりしていたが、その手品の腕前は、いつしかお巡りさんさえ引き込んでいた。

その頃おじさんは休みの日にもなると、大人でさえも見に来るくらいの人気者になっていた。

何よりおじさんは腕がいい。テレビでしか見られないような凄い手品を見事にやってのける。

しかもそれをタダで見せてくれるのだから、人気も出るだろう。

道具を沢山積んだ大きなリアカーを引きながら公園に姿を表す、言葉を発せず筆談する、素性も全く分からないおじさんはいつしか名物になっていた。

『きょうはどんなマジックがみたいかな』

謎だらけのおじさん、今思えばおじさんかも分からないが、その手品師はとても魅力的だったのだ。

『じゃあきょうはハトさんをだしてみよう』

空だった筈のシルクハットから現れたハトに僕らは驚きの声を上げたものだった。

おじさんの手品を初めて見てから二年くらいたった頃だったろうか。

おじさんは休むこともあったが、それでもいまだに手品を披露していた。

僕もしょっちゅう見ることはなくなり、たまに手品をのぞく程度になった。

僕は確実におじさんを見ることが少なくなってきていた。

そんなある日のこと。僕は幼なじみの美智に誘われた。

「今日一緒におじさんの手品見に行かない？なんか凄い新作をやるんだって！」

美智はおじさんの大ファンだった。ほぼ毎日手品ショーに顔を出し、ショーの後も興奮したようすでおじさんに話しかけていた。

今は疎遠になっている僕と違い、より親しくおじさんと接しているのだ。

「まあいいけど」

「じゃあ学校から帰ったらすぐに公園に来てね！」

この時妙に美智は興奮していた。

何故かはその時分からなかったが、とても楽しそうだったのを覚えている。

家に帰り、荷物を置いた僕はすぐに公園に向かう。

公園の前には落ち着きのない美智が立っていた。

「早く早く！前の方に座ろうよ！」

シートを引かれた観客席。美智に手を引かれ、前の方に座る。
いそいそと準備する1ヶ月ぶりに見たおじさんは、どことなく痩せたように見えた。
次第に子供も集まってくる。
珍しい大道具に、興味を持った大人も顔を見せ始めた。

準備が終わり、おじさんがスケッチブックに文字を書く。
『皆さんお待たせしました！』
『今日は新しい手品。』
『人間を消してしまう手品をやりましょう！』
わああ、と歓声。
僕はその時違和感を感じた。
『では早速始めます。』
『この手品にはお手伝いが必要です。』
『手伝ってくれる人はいますか？』

はいはいと手をあげる子供。美智も目を輝かせながら手をあげていた。

『じゃあ君に手伝ってもらおう。』

おじさんは美智を指差した。

「はい！」

美智はにこやかにおじさんに駆け寄る。

『じゃあ皆さん。この箱を見て下さい！』

おじさんは立方体の箱に手を添える。箱の側面がぱたりと開き、中身に何もないことを伝える。

『ではお手伝いさん。この中に入って下さい。』

「はい！」

元気良く返事し、美智が素早く箱に入る。そしておじさんは箱を閉めた。

『ではこの子を消してしまいましょう！』

しん、と観客が静まり返る。

おじさんは怪しい動きで箱をとんとんとステッキで叩く。

そして、箱にぶら下げたスケッチブックを一枚捲る。

『1』

捲る。

『2』

捲る。

『3！』

ばん、と箱をおじさんが叩く。すると箱はばらばらと開き、展開した。

中に美智は居なかった。

わあああああ、ぱちぱちぱち、

歓声が上がる。

おじさんは美智を見事に消してしまったのだ。

『いかがですか？これが人間を消す手品です！』

鳴り止まない拍手の中、おじさんはスケッチブックを捲る。

『では次の手品に移りましょう。』

美智のいないまま、手品ショーは進む。

『今日はここまで！皆さん楽しんでいただけましたか？』

『それではさようなら！』

拍手の嵐につつまれて、おじさんはお辞儀する。ばらばらと帰りだす観客の中で、僕は気になることがあって、おじさんに駆け寄った。

「おじさん」

片付け始めるおじさんは振り向き、スケッチブックを捲る。

『何だい？』

「美智はどこ？」

おじさんはああ、と頷き、ポケットから一枚の紙切れを取り出し、僕に手渡した。

『ひろくんどうだった？すごかった？手品が終わったらさきに帰っててね』

その丸っこい文字は確かに美智のものだった。
それを見て僕は美智が興奮していた理由を理解した。

おじさんはお面の口元に指を当て、しー、と秘密にすることを要求する。

美智は最初からおじさんの手伝いをすることになっていたのだ。
いわゆるサクラだ。

だからあんなに楽しそうだったのか。

僕は納得し頷いた。

このことを話すつもりは勿論ない。

おじさんもほっとしたように、僕に手を振った。

僕は素直に帰路につき、最初の手品を思い出す。

凄かったなあ。明日、どうやったのか美智に聞いてみよう。

きっと頑なに秘密にするであろう美智をどうやって説得しようか考えながら、僕は帰る。

次の日、美智に手品のタネを聞くことはなかった。

美智はその日から消えてしまったのだ。

次の日からおじさんも来なくなった。

二十年たった今でも、美智は見つかっていない。

公園手品ショー（後書き）

この話の裏が分かりましたか？

当てて頂けたら嬉しいです！

答えにガッカリされなければよいですが……（―・―；）

尽くす男

「君のためなら何でもするから……ずっと一緒に居て下さい！」

それがこいつ、山瀬の告白だった。

山瀬は冴えない男だったが、一途な男だった。

それこそ告白文句のように何でもする男だった。

私はそこそこモテる。それこそ男には困らない程度に。

だから私はこの告白を受け入れた。

顔ばかりの甲斐性なしにはもう飽きたから。

その点、山瀬はいいところのお坊っちゃん。甲斐性は腐るほどある。

私は言葉通り何でもさせることにした。

それが私たちの関係の始まり。

「欲しいバッグがあるの」
「買ってくるよ」
山瀬は次の日には買ってくる。
「食べたいものがあるの」
「連れて行くよ」
山瀬はどんなものでもご馳走してくれる。
「遊びに行きたいな。友達と一緒に」
「行ってきなよ」
友達の分まで、旅行の準備をしてくれる。
しかも空気も読めるようで、その旅行に「一緒に行く」などと面倒なことは言わない。

山瀬はこの上なく役立つ男だった。

見返りは出来るだけ一緒に居ること。とはいえ、同棲までは強要しない。
ただ時間がある時は常に一緒に居る。肉体関係なんて迫らない。ただ一緒に。愛してくれとは言わない。ただ一緒に。
なんて便利な男なんだ。

私はいい男を見つけたと思った。

しかし、財布は持ってしまうと意外と使い道に困るもの。
ブランドやら旅行やらアイドルやら、そういった金を貪るものに特別な興味が無かった私はすぐに求めるものを見失った。

それより山瀬と居ることの退屈さが勝る。

山瀬は何もない時に私と一緒にいるだけだった。面白い話もしなければ、素敵なデートプランも立てない。言われたことをこなして、ただ一緒に居るだけ。

つまらない奴……

私は飽きた。

「もう終わりにしない？」

そして別れ話を切り出した。

山瀬は言う。

「いいよ」

だが言葉は続く。

「でもずっと一緒だよね」

私は「え」と一声。

「約束したよ。何でもするからずっと一緒に……って。僕は約束を破ってないよね？」

山瀬は関係を切っても「ずっと一緒に居る」ことは撤回させない。

約束だから、の一点張り。

私は初めて、山瀬を面倒臭いと思った。

話を聞かない山瀬。それをどうしたらいいか考える。

そうだ。山瀬に約束を破らせればいい。

私は絶対に叶えられない願いを告げた。

「友達の遙が彼氏を自慢してくるの。ウザいから殺して」

殺人までは犯せまい。

事実、山瀬は困った顔をした。

そこで私はたたみかける。

「無理なら約束はなしね。私にはもう近付かないで」

山瀬は少し寂しそうな顔をした。

そして……

「分かったよ」

そうとだけ言い残して背中を向けた。

こうして私は山瀬から解放された。

……そう思っていた。

麻袋片手に私の部屋を訪れた山瀬を見るまでは。

「はい。これでずっと一緒だね」

ぞわりと背筋に嫌な感覚が走った。

まさか……

「開けてごらん」

「頭の大きさほど」の麻袋を開く。

「あ……あ……」

真っ白になった見慣れた顔があった。

「なに……これ……」

山瀬は微笑む。

「体は重いし目立つから」

私は震える声で山瀬を罵る。

「人殺し……！」

山瀬は首を傾げる。

「君が望んだのに？」

狂っている。狂っている。狂っている。狂っている。狂っている。

「け……警察……！」

電話を取ろうとする私に山瀬は優しく囁く。

「いいよ。警察を呼んでも。でも刑務所でもずっと一緒だよ」

「……！」

私は手を止める。

『ウザいから殺して』

私の声が響く。振り向けば山瀬の手にはレコーダーが。

「綺麗な声だね。こんな声でお願いされたら、前科のひとつくらい何だ、って思えるよ」

山瀬は優しく微笑む。

怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い！怖い！怖い！怖い！

「嫌……」

「こないで……」

「私の前から消えて……」

「姿を見せないで……」

「死ねっ！死ねっ！死ねっ！死ねっ！死んでしまえっ！この悪魔！」

必死で叫ぶ。

山瀬は応える。

「うん。分かった」

山瀬は私に背中を向け、そのまま進む。

そして塀を乗り越え……

ドサッ。

マンションの6階から落下した。

震える足を引きずり、下を見下ろす。

血だまりに沈む、動かない山瀬。

恐怖。そして山瀬から解放された安心感。

混乱する頭。

私はぽとりと遙の頭が入った麻袋を落とした。

「あ……あは……あはは……」

乾いた笑い声しか出ない。

私は何も理解できずに、泣きながら笑った。

～♪　～♪　～♪

不意になるメールの受信音。

私は壊れたラジオのように笑いながらメールを開く。

『はい。死んだよ。

ずっと一緒だよね』

私の体は持ち上げられて、そのまま塀を越える。

私が山瀬に解放されることはなかった。

尽くす男（後書き）

恋心を弄ぶのは止めましょう。

なかよしなふたご（前書き）

今回はホラーテイスト薄めの不思議&シュール系です。たまにはこんなのも入れるかもです。

なかよしなふたご

僕の学年には双子がいた。東雲兄弟である。

彼等は驚く程そっくりで、驚くべき特徴があった。

彼等は何故か、常に同じ言葉を発するのである。

好きな食べ物は？

「「ハンバーグ」」

好きな教科は？

「「国語」」

そんな感じに質問に全く同じように答えるだけではない。

彼等は別のクラスだった。僕のクラスには兄の信雄がいた。

朝のホームルーム、出席を取るときのこと。

「東雲信雄君」

「「はい」」

隣のクラスから弟、信彦の返事が重なる。

彼等の言葉は、まるで神様が悪戯でもしているかのようにぴったりと揃うのだ。

クラス毎に授業のスケジュールも違う。にも関わらず、彼らの声は揃う。

「「aです」」

数学と英語、違う授業の回答が重なる。最初は先生が狙ってやっているのかもと思った位だ。

しかし違った。先生でさえもそのシンパシーに驚き、気味悪くさえ思っていたのだ。

次第に東雲兄弟が当てられることもなくなる。

僕としては国語と数学など、全く共通項を持たないところや、長文を読ませるなどして、全く一緒の伝説が破れるところが見たかったが、それであってしまったら余計に気味が悪い。

東雲兄弟はそうして気味悪がられながら、面白がられながら伝説を続けていったのである。

こうなるとこの伝説を打ち破りたくなるひねくれ者の僕。

自己紹介を要求しても面倒くさいと名字だけ名乗り、違う言葉を話してと頼むと嫌だと返す二人に違う言葉を言わせる方法はないのか？

僕は考えた。

そして二人並んで水飲み場の前に立つ東雲兄弟に声を掛ける。

「ねぇ東雲くん」

「「なに？」」

ぴたりと揃った返事が返る。

「東雲くんってさ、兄弟仲良しだよね」

「「……別に」」

溜めのタイミングまでばっちりだ。二人は目を背ける。

「仲良くないの？いつも一緒なのに」

「「別に」」

またも一緒。

此処で僕は考えてきた質問を放つ。

「東雲くんってさ、兄弟で違うことってあるの？」

僕は本人達から直接違う部分を聞いたのだ。

「面倒くさい」と返されたらおしまいだったが、意外にも東雲兄弟は考える。

「「……名前とかか？」」

そしてぴったりととぼけた回答。

「そうじゃなくてさ……好きなものとか嫌いなものとかで違いってないの？」

二人が以前に「名前を名乗るのが好きじゃない」と言っていたのを思い出し、名前を言わせるという選択肢は避ける。意外と気難しい二人は気に入らないととことん拒否する。

そして僕の質問は成功した。

「「あるけど」」

東雲兄弟は応える。

やった！本人達が言うくらいだ。確実に違う答えがでるだろう。

僕は伝説が破れる瞬間に胸を踊らせ尋ねる。

「それってなに？」

「「嫌いな奴」」

ぴたりと揃うが、此処からが問題。

「それって誰？」

どうやら東雲兄弟はこの話題は話してもいいそうだ。顔を見合わせうんと頷く。

ついに聞ける。

東雲兄弟が違う言葉を放つところを。

嫌いなやつが違うと二人は認めた。そして、まさか同姓同名の人間の名前がでるとは思えない。

そんなことが起こったら、まさしく奇跡と言えよう。

僕は答えに集中する。

その答えは……

「「こいつ」」

二人は互いに指を差し合い、声を揃えて答えた。

なかよしなふたご（後書き）

そして二人は互いにナイフで左胸を刺し合い、同じように息絶えた……なんてオチはありません（―．―；）

絶命すればいいという問題じゃありませんものね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4318u/

一人百物語

2011年10月8日14時22分発行